特集　新学習指導要領を読む

地理的見方・考え方をどう育成するか

前田俊二（まえだ しゅんじ）
一九四八年大阪府生まれ。広島大学大学院修了。広島大学学校教育学部助教授。

このたびの新学習指導要領をみて、評者はとくに地理的見方・考え方の育成をどうすべきかという点に注目したい。中学校・高校（地理A・地理B）どちらの新学習指導要領（以降、新指導要領と略記）にも「地理的な見方や考え方」という用語が目標の中に大きく出ているが、このことから地理的見方・考え方の育成が地理教育においてかなり重要視されていることがうかがわれる。以下、この点について、評者なりの考え方や指導法の意見を述べさせていただく。

地理的見方・考え方の捉え方と指導に関して

《地域差の認識》

まず、地理的見方・考え方は一体どのように定義し捉えられているのであろうか。これに対する学者・教育者の考え方は実に多岐にわたっているが、少なくともこの原点となる考え方として、地理学の定義すなわち「人類の住所としての地球表面をその地域的差異という観点から研究する」（二宮書店『地理学辞典』）という点にあることは論を待たないであろう。地理教育はしたがって常にこの地理学の中心的命題である「地域差の認識」という観点を忘れないように行われる必要がある。

ところで、学校教育の現場ではこのことが明確に意識され、教育が進められてきたであろうか。ある地域の特色を把握するのに、絶えず、あるいは適宜、他の地域との比較を通して行うという姿勢、これが地理教育者としての基本的立場として重要であろう。従来、例えば、世界地理の学習の場合、個々の国がお互いに何の比較もなされないままに、ただ羅列的にそれぞれの国の知識のみが教えられていくということが繰り返されてこなかったか。これでは生徒はある地域の特色がわかったようでわからないという一種の錯覚に陥りかねないであろう。地理を学ぶことの楽しさ、おもしろさは何といっても「自

分たちとは違った世界について知る喜び」にあることはいうまでもないのであり、まさにこの点が地理教育の出発点でもあろう。新指導要領の中に日本の諸地域の特色を「世界や日本の他地域との比較や関連において理解させる」（中学校内容(2)のウ）や、「世界と日本を比較し多面的に考察させることによって」（高校地理B目標）とある点を大いに生かし、この比較的視点が地理の授業全体に脈打っているというようになりたいものである。

《系統地理的見方の重要性》

次に、地理的見方・考え方に関して、地域差の認識をさらにどう深めていくかという問題がある。地域と地域を比較するのに、一つ一つの現象に分解して行うのがよいのか、あるいは総合的な見地から行うのがよいのか、新指導要領ではこの点についての明言を避け、両者折衷的な考えが随所に折り込まれている。例えばこの点は、高校地理B内容の取扱い(2)のイにおいて「系統地理的な方法と地誌的な方法との相互補完の関係に留意し、取り上げた地域については多面的に扱うよう努めること」と明示されていることからもうかがわれる。いずれにせよ、両者の立場に共通していえる重要な点は、「日本や世界の各地域における人々の生活には地方的特殊性と一般的共通性のあることに気付かせ」（中学校目標(2)）とある点や、「世界の人々の生活文化に関する地域的特色や共通の課題を理解させ」（高校地理A目標）ということにある。地域差の認識をより深めるには、単に差異だけに注目するのではなく、地域と地域がどういう点で類似し、またその類似した点（現象）がどのように微妙な変化や差をもっているかという視点であろう。すなわちこれは、個個の事象の分布には何らかの法則性（共通性）があり、それらの法則性に変化を与えているものが地方的特殊性なのであるという見方である。例えば、人口の分布を取り上げた場合、人口は土地の高度が増すごとに減少するという一つの法則があるが、これに逸脱する地域すなわちアフリカ大陸や南アメリカ大陸、それにヨーロッパ地中海沿岸地域があるという具合に。このように、各系統地理学で見だされた法則というものをベースに、地域の特色をみるという方法（科学的地理認識法）はきわめて重要な視点であると思われるが、新指導要領ではこれがどの程度教えられるのか、すなわち、どういう種類の法則性が、どの程度まで扱われるのか、今一つ明らかではない。法則性というものの学習が果たして中学生あるいは高校生の理解にとって困難なことなのであるか、この

点の吟味がもっと追求されるべきであろう。

《地域の捉え方の問題》

さらに、地理的見方・考え方に関係することとして、地域の捉え方の問題がある。周知のように、地域に対する見方は等質地域と機能地域、形式地域と実質地域などきわめて多様であるが、これらを明確に意識したような指導が行われるのかどうか。新指導要領では、「日本や世界には大小様々な地域的まとまりがあり、それらの地域は相互に関係し合っている」(中学校目標(3))ことや、「自然や文化などの多様性に着目させて世界をいくつかの地域に区分する方法を理解させるとともに、世界の地域の特色を総合的に把握する」(高校地理B内容(4)のア)など等質地域・結節地域の見方はかなり踏まえられているようであるが、これ以外にさらに、形式地域・実質地域の見方の問題なども含められるべきであろう。例えば、任意の都市の地域的広がりと分化はその都市の行政域を超えて拡大しているという具合に。また、地域はあくまでも便宜的に境界づけられて、認識されている場合が多い等々。

地域と地域がどう結びついているのかという地域結合関係の視点については、日本と世界の結び付きというテーマで、中学校・高校のどちらの指導要領にも盛り込まれている。また、全体的視野から部分地域を見、位置づけるという視点も、「世界的な視野から」あるいは「地球的視野から」という言葉にうかがわれるように、中学・高校同様によく配慮されている。

ところで、中学・高校どちらの新指導要領にも見られない重要な地域の捉え方の問題として、見る地域のスケールによって地域を特色づける原因の重要性が異なるという視点がある。例えば、人口分布の地域差の原因について考えてみると、地球的視野から見た場合、自然環境とくに気候の影響が強く現れるが、ミクロな地域レベルで見た場合、もはや気候は重要な要因とはならず、かわって土地の形状とか都市・産業の分布という要因が大きく関わってくるのである。もっとも、この見る地域のスケールによって地域差の程度とその原因が異なるという視点は、既述の等質地域の体系化と密接に関係した問題ではあるのだが。

地理的見方・考え方を育成する一指導法の提唱

地理的見方・考え方の育成は、以上のように実にさまざまな面から行われることが、新指導要領からもうかが

われるが、しかしこれらは互いに脈絡もとれていず、秩序だった統一的な概念の枠組みの下にあるというわけではない。種々雑多な地域認識のある中にあって、そこには首尾一貫して流れる地域認識の体系というものが、不十分ながらも一つ示されていてよいのではなかろうか。

ここで、評者なりの一つの体系化の例を提示させていただく。

新指導要領（高校地理B内容(4)）の中に「地域の特色を総合的に把握する方法を考察させる」とあるが、評者はこの考え方を前面的にクローズアップさせたいと考える。そしてこの総合化のための一手法として、自然環境や社会経済環境の影響を総合的に反映するような一指標を取り上げ、これの分布を通して地域の特色を考えるという方法を提唱する。この環境の総合的な反映指標として、評者はとくに人口を重視する。人口の学習は中学・高校どちらの指導要領においても取り上げられている項目であるが、従来これはとかく他の項目との関連づけもないままに平板なものに終わってしまい、おもしろくない授業項目であったようである。せっかく人口について学習するからにはより有効にこれを行いたいものである。

教科書には、必ずといってよいほど世界の人口分布図が載せられているが、これにまず大いに注目させ、人口はどうしてこのように不均等に分布するのだろうか、そしてこれに影響を与えている地域の要因（特色）は何なのだろうかという具合に、人口という指標を通して、実に多面的かつ実り豊かな地域的特色の統一的な把握ができると思うのである。

人口の問題はともかくとしても、中学・高校いずれの新指導要領においても、かなり体系的かつ問題解決的な学習例が一つ盛り込まれるべきではなかっただろうか。

まとめ

以上、地理的見方・考え方をどう育成するかという問題意識の下に、新指導要領を検討してきた。要は、地理の学習を通じて、さまざまな豊かな地理的知識が教えられるというばかりでなく、同時に方法論としての地理的思考力の育成を絶えず念頭において、授業は進められなければならないであろう。

〔参考文献〕
(1) シンポジウム報告（一九八六）「地理的見方・考え方と地理教育」地理科学四一―一
(2) 中嶋喜文（一九八八）「人口学習は人生設計のベースである」地理一一月増刊（地理教育特集号）「探究・学校の地理」
(3) 浮田典良編（一九八四）『人文地理学総論』朝倉書店